縄文笛通信

２０１６年・春夏号
発行　柴田毅・縄文笛コンサート事務局
（喜納ゆかり）

新しい年を迎え、春から夏の季節へと移ろい始めています。日頃より私共の活動を応援下さり心より感謝申し上げます。この頃は、様々な出来事に戸惑い心沈むことが多くありますが、確実に時は流れていることを感じるとやはり、前を向いてゆくよりないと気が付きます。優しさに触れ、幼子の元気な姿を見て明るくなり、木々の芽吹きに感激し、花の香りにときめく日々でもあります。

昨年２０１５年の演奏活動の一部ですが、ご報告させていただきます。今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。

★フランス・パリにて演奏

２０１５年１０月３０日～１１月初旬。パリ・ギャラリーSATELLITE にて「縄文展」が開催されました。写真（秋山邦雄氏）、復元土器（戸村正己氏）、絵画（渡辺由紀子氏）と共に日本から向かいました。縄文笛　毅は、開催オープニングにて演奏を披露いたしました。思いがけず現地のミュージシャンや、画家で詩人の清水研介氏との即興コラボ演奏も実現し、刺激の多いひと時でした。演奏が終わるとたくさんの方が話しかけてくれました。「驚いたわ！」「迫力あったよ！」「面白いわ！」等など。言葉が出来ないもどかしさがあり、通訳の方に助けてもらいながらもどうにかわかり合いたいものです。時々？？となり「あー、そういう意味ね！」とお互いに大笑いし、音楽や食べ物、懐かしい旅の思い出、文化の違いまで話も弾みました。交流出来ましたことは貴重な経験でした。

二十数年ぶりのパリでした。当時お世話になった友人にパリ行きを報告した矢先、ご病気で亡くなりました。彼との思い出を胸に抱いた旅でもありました。日本に帰国一週間後、あの同時多発テロ事件が起こりました。事件のあった場所は、何度も歩いた場所でもあり帰国後とはいえ恐怖が走りました。道すがら話しかけた方々のお顔も、ご無事かと浮かびました。未だ様々なことを考えるパリの旅でした。思い出深いパリ。またいつの日か、訪れます！！

ローランさんのギターと縄文笛のコラボです。
会場は、人でいっぱいとなりました。

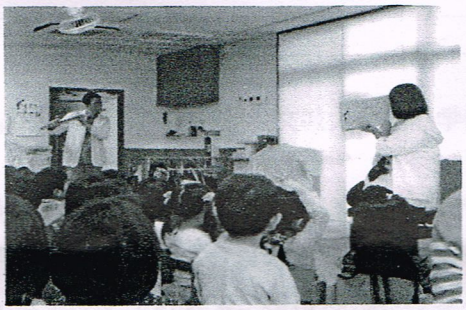
モネの「睡蓮」。ほとんど見えないのですが、
この作品が一番好きです。

★大磯芸術祭　参加

地元の街をアートで盛り上げよう！という内容で街の有志の皆様が企画して下さいました。
お花溢れるアンティークカフェ「大磯珈琲庵」のお庭、古民家のギャラリー&食事処「桃の家」、西行法師ゆかりある歴史深い俳諧道場「鳴立庵」のお庭にて演奏させていただきました。

★愚安亭遊佐ひとり芝居『鬼よ』に生演奏で共演

厚木演劇鑑賞会様による企画公演が６月に開催されました。この作品では、縄文笛毅の音色が深く関わっています。
『鬼よ』という作品は、実在の方（愚安亭さんのお兄様）をモデルにされています。原子力船むつで揺れる下北半島に漁師として生き抜いた方でした。『鬼よ』の作品を中心に、愚安亭さんの迫真の演技、お芝居にかける姿は、ドキュメンタリー番組となり、好評で何度も再放送されています。２０１４年は文化庁芸術祭テレビ・ドキュメンタリー部門で優秀賞に輝き、２０１５年はモンテカルロ・テレビ祭（国際的なテレビ放送作品のコンクール）にノミネートされました。番組制作は　かわうそ商会、wowow　です。



★保育園での「うたとおはなしの会」

月一度のペースで、Ｙ保育園の保育士さんたちとの取り組みです。
保育士さんのお話に、フルートの伴奏をつけています
共にリハーサルをして本番に臨みます。
季節の童謡なども歌います。今の子どもにとっては、なかなか機会のない時代かもしれません。大きな声で、楽しく歌っている姿にいつも感動するのです。

★福祉施設での演奏

障害児・障害者の施設、高齢者施設への出前演奏活動を続けております。「NPO 法人スプラウト」、「クローバー・デイケアセンター」、「七里ヶ浜ホーム」、「小さき花の園」の各皆様、フルートや土笛の演奏を楽しんで下さいました。

縄文笛毅は、１９８９年頃より音楽活動を始めています。人のお役に立ちたいと高齢者施設や障害児者施設・団体での活動は、こだわって続けて参りました。視覚障害者である立場からもより良い社会をと願っております。２０１６年９月までの期間は財団法人「倶進会」様の助成を賜り、より一層力を入れての「出前演奏」活動中です。

この活動に際しまして、お忙しいなか両氏から推薦文を頂戴いたしました。（２０１５年）
ご紹介させていただきます。

下司　きみ江　様（特別非営利活動法人　障害児・者・家族サポート事業所スプラウト　管理者）

当事務所は、重度・重複障害児・者の生活介護と放課後デイサービスを展開している通所事業所です。縄文笛さんは、お近くにお住いで設立当初からの様々な巡りあわせにより、年数回、演奏ボランティアで来所して頂いています。当事業所の利用者様たちは、圧倒的に感情表現が弱い方達ですが、こと　音楽に関わると豊かに感情が表出されます。

縄文笛さんのコンサートは、とても珍しい「縄文笛」の素朴な音色、さわやかで穏やかな「フルート」の演奏、「ちくわ」を使ってのパフォオーマンス等が組みたてられ、今まで不穏気味に過ごされた方も、眠気が勝っていた方も、途端に　興味津々に縄文笛さんに意識が向き表情が出てきます。言葉で表現できる方は興奮気味に、その様子を家人に伝えている場面も見られます。音楽の偉大さを改めて認識させられます。

「縄文笛」が非常に珍しく、接する機会もまれな状況の中で惜しげもなくご披露して頂き、また継続してボランティアして下さることに利用者様・保護者・職員一同感謝するとともに、今後も貴重な機会が拡がるように願い、縄文笛さんの活動を推薦します。

山脇　千賀子　様（文教大学国際学部　准教授）

私が初めて縄文笛毅さんの演奏をきいたのは、2000 年度文教大学国際学部における新入生必須授業である「国際学入門」において、当時の同僚であった戸田三三冬先生の推薦によって、授業内での演奏会を実施したときのことである。それ以来、2015 年現在に至るまで、毎年「国際学入門」において、縄文笛さんの演奏会を実施している。

「国際学部入門」という授業において、縄文笛さんの演奏をしていただく意図・教育的目的は以下のとおりである。

１）縄文時代の遺跡から出土する土器レプリカを活用した縄文笛さんの音楽的感性に基いて構成されるオリジナルな音楽にふれることによって、日本人にとって始原の歴史的時間に生きた縄文時代の人々のつながりを想起させる。それによって、人間および社会がいかに変遷を遂げてきたのか、あるいは変わらないのか、を感性に基づいて学生個々人が考える契機としてもらう。

２）地球上における生きとし生けるものの間でのつながり・かかわり・まじわりを考えることが、「国際学入門」における学びの課題であるが、縄文笛さんの演奏会では、大地や海とともに生きる植物・動物・人間のあり方を再考させる刺激に満ちている。このような刺激を、論理的な言葉によって説明することはきわめて困難であるが、縄文笛さんの演奏会を体験した学生たちの多くは感性のレベルで確実に動かされて思考していることが、これまでの演奏会の後の学生によるコメント記録によって明らかになっている。

３）文教大学国際学部では、多様な人間のあり方を尊重するための社会的なしくみづくりにかかわる人材育成を教育目的のひとつとしている。視覚しょうがい者であり、素晴らしい音楽家である縄文笛さんと本学における演奏会で学生がふれあうことによって、そのような多様な人間像のひとつに目を開かれる貴重な機会になっている。

以上で述べたように、縄文笛さんの演奏会は、さまざまなバックグラウンドを持った人々にとって、それぞれの特性に対応した多様な学びと喜びとよろこびをもたらす機会であることは明らかです。縄文笛さんの演奏会をより多くの人々に体験していただきたいと心より祈念しております。以上